

【入試ガイドブック_〈問2〉】

2025 年度入試 十文字学園女子大学 教育人文学部

文芸文化学科 総合型選抜
課 題（小論文）

【注意事項】

- 1 開始後、小論文用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。
- 2 各自が自由に考えた題名を書いてください。
- 3 小論文用紙は、横書きで記述してください。
- 4 文字数は 720 字以上 800 字以内です。

次の文章を読み、言葉を撤回することについて、あなたの考えを 720 文字以上 800 字以内で論じてください。 内容にふさわしい題名もつけてください。

自らの言葉に責任を持つということ

昔から、「吐いた唾は吞めぬ」ということわざがある。一度内から出した言葉はもう取り消すことができない（だから、注意してしゃべるように）という意味だ。しかし、ときに政治家などは、「吐いた唾を吞みます」という意味で、「発言を撤回します」と言い放っている。これは、それこそアリスが迷い込んだような世界でしか通用しないはずのナンセンスな台詞だが、自分の言葉に責任を負わず、有耶無耶にして切り抜けるためには、むしろそうした言葉もどきの方が都合なのだ。

もしも、自分の発言がたとえば事実の誤認に基づいていたのであれば、そのままそう言えばよいだけの話だ。「かくかくという私の認識は誤りでした。しかじかの通り訂正します」と認めることが、人が当然すべき「声振り」である。しかし、「発言を撤回します」という言葉が「口に出した言葉を取り消す」という意味で用いられ、その歪んだ言葉を私たちが拒絶せずに受け入れてしまえるのであれば、人は自分の言葉が意味していたはずの認識、考え、構想といったものの誤りを認めなくてよいことになる。自分が何を言ったかに向き合い、それに対して相応の責任を負う必要がなくなる。「言い方が悪かった」という風に当該の言葉遣いだけを訂正して、後は適当に言葉を濁せば済んでしまう。そしてそうなれば、（中略）相手の言葉を真面目に受け取って、それに応答するという、対話の基礎が壊れてしまうことになる。

これが「鏡の国」や「不思議の国」の話であれば別にいい。本を閉じればその世界は消えてなくなる。問題は、いま私たちはナンセンス文学を愉しんでいるのではなく、自分たちが暮らしている現実の社会で、この種の状況にたびたび直面しているということだ。しかも、それは往々にして、言葉が最も重視されるべき場で起こっている状況なのである。

古田徹也（2023）「自らの言葉に責任を持つということ」『いつもの言葉を哲学する』朝日新聞出版